

学校生活

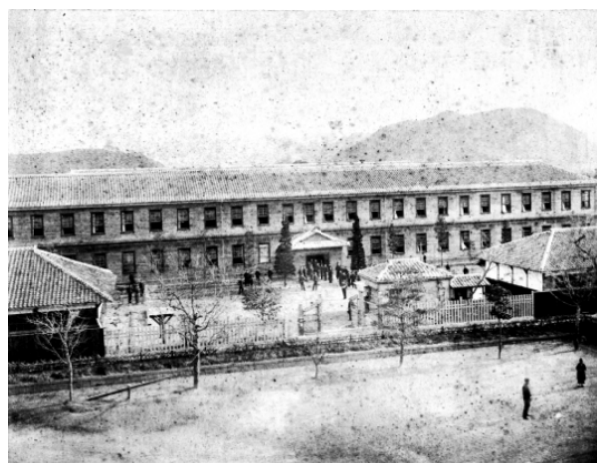
寄宿舎

明治末頃から大正年間にわたって、師範教育の充実とともに施設整備も進んだ。中でも寄宿舎は、多くの学生の生活拠点として充実が図られた。当初より師範学校は全寮制であったため、近隣の学生でも自宅通学は許可されなかった。

寄宿舎は、山口県尋常師範学校時代には現在の山口市役所の辺りに校舎と並んで建てられていたが、学生数の増加にともない狭隘となったため、明治32(1899)年からは、通りを隔てた山口尋常中学校(現在の山口市民会館)の移転後の建物も利用した。その後、増改築を行い明治34年4月には同所に寄宿舎3棟と食堂が完成した。玄関と道路の間に広場があり、テニスコートや器械体操具を配した当時としてはハイカラな建物であった。

1階に自習室と生活室、2階に寝室という造りになっており、寝室にはワラ布団を敷いた寝台が並べられていた。掃除や食事の時間、門限など規律は厳格であった。しかし同室会や全寮挙げてのうさぎ狩り、樫野川の蛍狩りなどの寮ならではの楽しい行事も多くあったようである。教師の育成において重要な場であった寄宿舎は、後に「時擁寮」と呼ばれるようになり、多くの若者の学生生活を支えた。

大正2年には女子部も寄宿舎ができる。はじめは下豎小路にあったが、大正9年の女子師範学校設立とともに室積に移転した。



明治34年4月に完成した寄宿舎



食堂

(「青史」昭和14年卒業生記念誌より)



自習室

(「光被」昭和4年卒業生記念誌より)

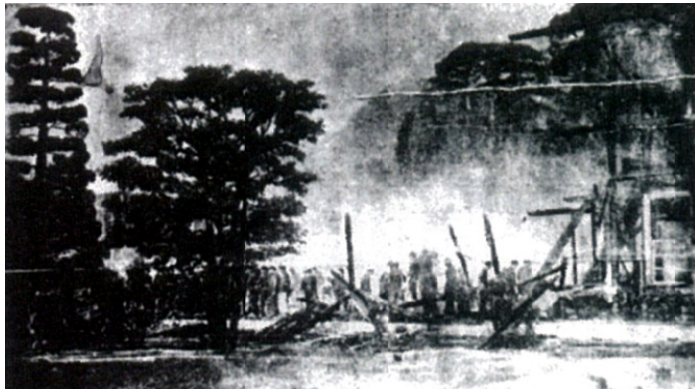
本館の焼失と再築

教員養成所時代には、山口明倫館の洋学寮の教場を襲用していたが、その後、同所に2階建ての新校舎を建設した。しかし師範学校となり、学生数の増加から教室が狭くなったため、明治20(1887)年、上司淵蔵校長の時代に土地を購入し、明治25年から3か年計画で校舎を増築した。

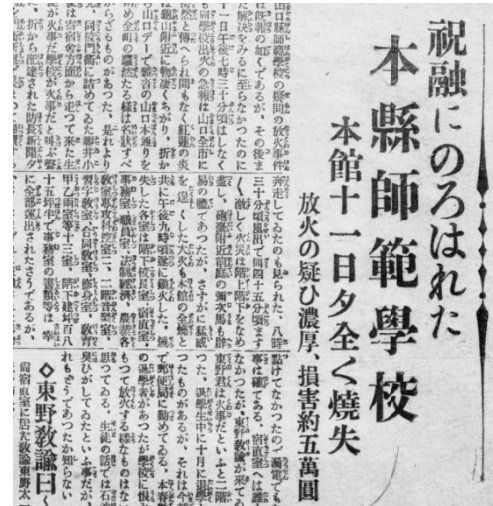


明治28年に完成した本館

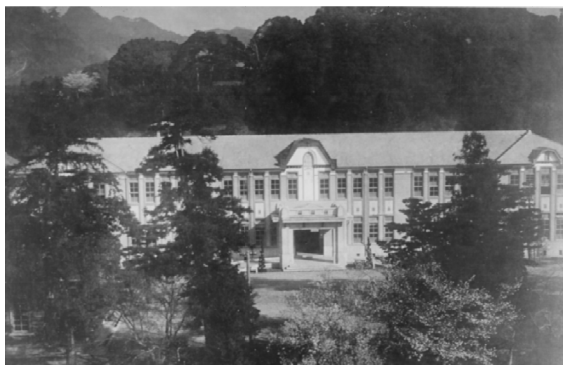
ところが、昭和2(1927)年12月11日、この校舎は火災という大惨事にみまわれる。午後7時30分、本館2階より出火し、すさまじい勢いで燃え広がり辺りは火の海と化した。亀山付近には黒山の人だかりができ、軍隊や消防組、高等学校生徒の消防隊の消火活動に加え、師範学校生徒も寄宿舍からバケツを手当たり次第運び出し、必死の消火活動を行った。午後9時頃、1階と2階すべてを焼失し鎮火。損害額は約5万円ともいわれた。火災の原因は不明で、放火の疑いもあると当時の新聞は伝えている。



(上) 焼失した本館(「関門日日新聞」昭和2年12月14日)



(右) 火事を伝える記事(「防長新聞」昭和2年12月13日)



昭和4年に完成した本館

全焼という事態を受け、県は焼け跡に本館一棟を1年かけて再築することを決め、昭和4年4月、スレート葺で白亜のモダンな校舎が完成した。1階・2階に8教室、玄関は自動車昇降に便利な造りで、清楚なバルコニーもあった。計画の段階では、耐久性から鉄筋コンクリートにする案もあったが、県財政の逼迫により木造となった。この建物は、後に山口大学教育学部の校舎となり、次に改築される昭和30年後半まで多くの学生の学び舎として使われ続けた。

水泳鍛錬

師範学校では、生徒の心身の修養鍛錬のため、明治38(1905)年から、毎年9月初頭に榎野川出合で水泳鍛錬を行った。水泳鍛錬は女子師範でも行われ、室積湾一周約4kmを、4時間30分で泳いだという記録もある。



第1回水泳大会(大正2年頃)



女子師範の水泳の授業

教育実習

師範学校では学習の総仕上げとして教育実習があった。県下教育界でエリート中のエリートともいえる附属小学校の訓導(当時の正教員をこう呼んだ)の下で、70日間の実習が行われた。この時ばかりは夜の12時過ぎても寮の明かりが消えないくらい猛勉強をしたという。



実習の様子(1年生の運動の授業にて)

修学旅行

5月の初め、最終学年になると9日間の修学旅行があった。当時の修学旅行は学校の授業として扱われ、旅行中も校内と変わらぬよう規律厳守・公德尊重を説いている。昭和15(1940)年の



(上)鎌倉での記念撮影(「光被」第5号より)

(右)修学旅行の葉(昭和15年のもの)



修学旅行は5月4日から12日の間、三府(東京・京都・大阪)を回った。山口を朝6時頃出発し、大阪、奈良、鎌倉、東京、京都を見学し、12日の朝6時ごろ帰ったようである。

奉公塾

皇国民の教育にあたる教員を養成するにあたって、山口県師範学校時代に苦瓜恵三郎校長は、農業こそがわが国民的性格の母胎であり、皇国民精神の淵源もまたここにあるとして、昭和14（1939）年8月、山口市内の法泉寺（現在の滝町の辺り）に田地約1町5反と農家1軒を借り受け、奉公塾を開設した。毎日1名ずつ入塾し、一週間ここで生活を送り退塾していた。



奉公塾の塾舎

学業成績にかかわらず、毎日、入塾者の半数は塾舎から登校し、半数は農地の開墾や作物の植え付けなどに従事した。この塾は昭和18年頃まで存続していた。

校友会活動

校友会は明治36（1903）年に創設され、精神修養や身体鍛練、レクリエーションを兼ねた行事を、教職員と生徒が一体となって行った。校友会では、校内活動のみならず、広く県下の青少年や児童の文化、体育の振興発展を援助するような活動を行っていた。



学童音楽会

文化部、運動部それぞれ活動していたが、生徒の心身の強化鍛練という立場から運動部の活動はとくに奨励されていた。そのため1、2年生の間は運動部、3、4年生になると運動部を退部するか、またはそれと並行して文化部で活動を行う生徒が多かったようである。運動部の活動ではそれぞれ優秀な成績を残した。



相撲部



排球部